

[書評]

西山佑司『日本語名詞句の意味論と語用論  
—指示的名詞句と非指示的名詞句—』2003.  
東京：ひつじ書房. pp. xi + 442. ISBN 4-89476-180-7.

富永英夫

本書は、日本語名詞句、および、それを含む文の意味解釈の問題を詳細に検討したものである。この問題に関する著作は多く存在するが、本書の特徴は、次の二点であると思われる。第一に、本書は、意味論と語用論を明確に区別する前提に立っている点である。従来の日本語研究は、著者が指摘しているように、すべてではないにしても、言語資料を収集したり、整理したりすることに終始し、意味論と語用論の区別を曖昧にした「意味と用法の研究」としてまとめられていることが多いが、本研究は、まず名詞句自体の意味の問題を十分に押さえた上で、その具体的な使用における解釈の問題を考察することによって、名詞句の意味解釈が事例の記述のレベルにとどまらず、言語学的に深い分析になっている。第二に、本書は、極めて体系的である点である。本書は、十数年にわたる研究の成果がまとめられたものであるとのことであるが、そのような場合、論文の単なる集積として、一冊の本にまとめられただけのものが少なからず存在するが、本書は、日本語名詞句を、後に詳しく説明する、「指示的名詞句」、「非指示的名詞句」、「変項名詞句」、「飽和名詞」、「非飽和名詞」といった限られたキーワードを用いて、さまざまな角度から考察し、日本語名詞句を含む文に潜んでいる規則性を明らかにしている点において、極めて言語学的で、全体が有機的なつながりを持っている。

本書は、次の構成からなる。

第1章 名詞句の意味と解釈

第2章 指示的名詞句と非指示的名詞句

第3章 コピュラ文の意味と名詞句の解釈

第4章 「象は鼻が長い」構文の意味解釈

第5章 「鼻は象が長い」と「魚は鯛がいい」構文の意味解釈

## 第6章 カキ料理構文と非飽和名詞

## 第7章 ウナギ文と措定文

## 第8章 倒置指定文と有題文

## 第9章 名詞句の解釈と存在文の意味

第1章から第3章は、いわば、原著の導入部に当たる章で、原著の基本的な考え方や全体を通して使われる概念が説明されている。第1章は、意味論と語用論の区別の重要性の指摘、語用論の原理としての「関連性理論」の解説があり、そして、名詞句だけを切り離して論じることのできる性質の問題として、「NPのNP」という形式の名詞句を取り上げ、その意味論的分析と語用論的解釈について論じている。その議論の中で、原著のキーワードである「飽和名詞」と「非飽和名詞」の区別が提案されている。第2章の前半は、これも原著のキーワードである「指示的名詞句」と「非指示的名詞句」の議論に割かれており、ここで特に注意すべき点は、この指示的名詞句と非指示的名詞句の区別は、意味論的な区別であるが、名詞句自体が有している性質の違いによるものではなく、名詞句が文中において述語との関係で果たす意味機能の違いによるものである点である。さらに、指示的名詞句には、語用論的な区別である、属性的用法と指示的用法があり、非指示的名詞句には、意味論的に性格が少し異なる、叙述名詞句と原著で特に重要な役割を果たす変項名詞句があることが詳述されている。第2章の後半と第3章は、「AはBだ」や「BがAだ」という基本的なコピュラ文における、名詞句の持つ意味機能を指示性と非指示性の観点から、とりわけ、「変項名詞句」というキーワードを用いて、徹底的に分析している。

第4章から第7章では、日本語研究で頻繁に議論されているさまざまな構文が取り上げられている。第4章は、最も議論の多い、「象は鼻が長い」構文の意味構造を名詞句の指示性と非指示性の観点から再検討している。第5章は、「象は鼻が長い」構文と類似の「鼻は象が長い」構文や「魚は鯛がいい」構文について、これも名詞句の指示性と非指示性の観点から分析を行い、「象は鼻が長い」構文との本質的な違いを説明している。第6章の前半は、「カキ料理は広島が本場だ」構文を取り上げ、第1章で導入した「飽和名詞」と「非飽和名詞」というキーワードを用いて、この構文の特性を解明し、「象は鼻が長い」構文とは違う意味構造を持つことを論証する一方、第6章の後半は、この二つの構文が、発話の中においては、同じ意味解釈を持つ場合があることを論じている。第7章は、いわゆる「ウナギ文」を「隠された変項名詞句」という観点から、新しい分析を提示している。

第8章は、従来の日本語研究において、「主題」という概念が混乱して用いられた結果、「～は」という形式の名詞句は、すべて「主題」である、と誤解されてしまっていたことが述べられている。第9章は、それまでの章の分析結果を踏まえた上で、「指示的名詞句」、「非指示的名詞句」、「変項名詞句」、「飽和名詞」、「非飽和名詞」といったキーワードをすべて用い

て、さまざまな角度から「Aがある」あるいは「Aがいる」といった存在文の持つ意味構造を明らかにしようとしている。

以上が本書の概要であるが、そのすべてについて詳しく論じることは到底できない。したがって、以下では、上記のキーワードを中心に、評者が本書で特に重要と考えるいくつかの問題を取り上げ、紙面の許す範囲で、紹介することにした。

意味論上の区別である、指示的名詞句および非指示的名詞句の区別は、名詞句の最も基本的な区別の一つである。言うまでもなく、ある名詞句が「指示的」であるということは、当該名詞句が世界の中の何らかの対象を指示する場合であり、「非指示的」であるということは、世界にそのような指示対象を持たない場合であるが、ここで注意しなければならないのは、この区別は、名詞句自体が有している性質の違いによるものではなく、名詞句が文中の述語との関係で果たす意味機能の違いによるものである点である。次の例文には、「洋子の好きな作曲家」という同じ名詞句が使われているが、(1)と(3)では、指示的に、(2)と(4)では、非指示的に用いられている。

- (1) 洋子の好きな作曲家は病気だ。(p.59)
- (2) あの人は、洋子の好きな作曲家だ。(p.60)
- (3) 太郎は次郎に、洋子の好きな作曲家を紹介した。(p.59)
- (4) 太郎は次郎に、洋子の好きな作曲家を教えた。(p.60)

さらに、指示的名詞句には、Donnellanの用語を借りれば、指示的用法と属性的用法があり、したがって、次の例文は、二つの解釈を持つと考えられる。

- (5) 洋子を殺した奴は、精神異常者だ。(p.66)

下線部の名詞句を指示的用法として解釈した場合には、例えば、話者は、洋子を殺した特定の犯人を知っていて、その人物が精神異常者であると述べていることになり、属性的用法として解釈した場合には、話者は、洋子を殺した犯人が誰であるかは知らないが、誰であれ、そのようなことをする人物は、精神異常者であると述べていることになる。ここで重要なのは、この二つの区別が話者の意図に関係した語用論上の区別である点、および、指示的用法はもちろんのこと、属性的用法も、次に説明する非指示的名詞句と紛らわしいが、特定の人物を指示していないだけであって、やはり世界の中の人物を指示している点である。

非指示的名詞句には、著者によれば、叙述名詞句と変項名詞句があり、この二つは、後述するように、共通する側面もあるが、その違いは、文の意味に大きな影響を与えるものであるという。叙述名詞句とは、(6)に示すように、著者が「措定文」と呼ぶコピュラ文の述部

に現れる名詞句で、主語名詞句の指示対象について、それに帰すべき属性を表しており、指示機能をまったく持たないものである。

(6) 太郎は学生だ。(p.73)

一方、変項名詞句とは、著者が「指定文」と呼ぶ、(7)のようなコピュラ文の述部に現れる名詞句、および、著者が「倒置指定文」と呼ぶ、(8)のようなコピュラ文の主部に現れる名詞句であり、一見すると、指示的にも見えるが、実は、変項を含んだ命題関数を表しており、非指示的であるという点が非常に重要である、と著者は主張する。

(7) あの一ひとが洋子の指導教授だ。(p.75)

(8) 洋子の指導教授はあの一ひとだ。(p.75)

もう少し詳しく説明すると、これらの文において、「洋子の指導教授」は、「xが洋子の指導教授である」という変項を含んだ表現であり、これらの文は、「誰が(=どれが)洋子の指導教授であるか」という問いに対する答えを「あの一ひと」でもって指定しているのである。したがって、論理的には、変項名詞句は、他の名詞句で満たされるべき変項を内在した一項述語であり、その点では、叙述名詞句と同様であるが、変項名詞句を含む指定文と叙述名詞句を含む指定文の違いは、前者が変項を持つ命題について、その変項を具体的な値で埋めようとするのに対して、後者は、ある対象について、その性質を述べようとするものである点である。すなわち、両者の違いは、意味論的ではなく、語用論的な違いであると言えよう。

著者は、上記の名詞句の区別を用いて、日本語のさまざまな構文の曖昧性を論じているが、そのうちの基本的なものを紹介することにしよう。

(9) 太郎は、花子の好きな作曲家に関心がある。(p.97)

著者は、この文の下線部の名詞句を指示的にとるか、非指示的にとるかによって、いくつかの解釈が存在する、と主張する。著者によれば、当該名詞句を指示的名詞句の指示的用法として解釈すると、「花子の好きな作曲家」は、ある特定の作曲家を表しており、その人物に関心がある、という読みになり、属性的用法として解釈すると、「花子の好きな作曲家」は、特定の人物を念頭においているわけではなく、誰であれ、花子の好きな作曲家であれば、その人物に関心がある、という読みになる。また、非指示的名詞句の変項名詞句と解釈すると、「花子の好きな作曲家」は、花子の好きな作曲家は誰であるか、ということであり、(9)は、その値を埋めることに太郎は関心を持っている、という読みになる。評者の読み落しかもしれ

れないが、(9)には、少なくとももう一つの読みがあると思われる。つまり、当該名詞句を非指示的名詞句の叙述名詞句として解釈すると、「花子の好きな作曲家」は、花子の好きな作曲家のタイプを表し、(9)は、花子の好きな作曲家の持つ属性について、太郎が関心を持っている、という読みになる。この他、著者は、「知っている」、「分かる」、「教える」、「変わる」、「増える」等の述語が用いられた構文でも同じような曖昧性が生じる場合があることを指摘している。また、紙面の関係上、触れることはできないが、第4章と第5章では、同じく指示性と非指示性の観点から、「象は鼻が長い」構文、および、それと類似する構文の分析がなされ、その違いが詳細に述べられている。

いわゆる存在構文の分析にも、名詞句の指示性と非指示性の問題が重要な要因として関わる、と著者は主張する。「Aが存在する」という形式を持つ存在構文には、著者によれば、場所存在文と絶対存在文があり、それは主語名詞句が指示的名詞句なのか、非指示的名詞句なのかによって決まるという。

(10) この会社のなかに、洋子を殺したひとがいるはずだ。(p.103)

著者によれば、この文は、三通りの読みがあるという。まず、下線部の名詞句を指示的名詞句ととった場合は、「この会社のなかに」は、純粋な場所表現であり、「空間としての会社のなかに」を意味し、(10)は、著者が場所存在文と呼ぶ構文になる。さらに、この場合、指示的用法と属性的用法の二つの解釈があり、前者であれば、特定の殺人者が念頭にあり、この文の読みは、「空間としてのこの会社のどこかに、特定の洋子殺しの犯人がいるはずだ」ということになり、後者であれば、まだ特定されていない殺人者が指示されており、この文の読みは、「空間としてのこの会社のどこかに、誰であれ、洋子殺しの犯人がいるはずだ」ということになる。もう一つの読みは、下線部の名詞句を著者のいう変項名詞句ととった場合であるが、この場合は、「この会社のなかに」は、厳密には場所表現ではなく、「この会社の社員のなかに」とほぼ同義で、(10)は、著者が絶対存在文と呼ぶ構文になり、その読みは、「この会社の社員のなかに、洋子を殺した人物がいるはずだ」ということになる。以上が存在構文の分析の概略であるが、著者は、さらに詳細な考察を最終章において行っている。

指示的名詞句と非指示的名詞句の区別のほかに、もう一つ著者が提案している重要な区別として、飽和名詞と非飽和名詞の対立がある。著者によれば、飽和名詞とは、意味的に充足しており、それ自体で外延を決めることができるもの、すなわち、その集合を決定できるものであるのに対して、非飽和名詞とは、パラメーターを含んでいて、意味的に充足しておらず、それ自体では外延を決めることができないもの、すなわち、その集合を決定できないものである。具体例を挙げて説明すると、飽和名詞の「俳優」と非飽和名詞の「主役」を比較した場合、前者は、「芝居や映画で演技をすることを職業としているひと」というだけで十分

であるが、後者は、「芝居や映画で主な役割を演ずるひと」というだけでは不十分に感じられ、どの芝居や映画なのかをはっきりさせることが必要である、と著者は指摘する。つまり、「あなたは俳優ですか」という質問は意味をなすが、「あなたは主役ですか」という質問は、どの芝居（あるいは映画）のことなのかが分からない限り、意味をなさないということである。このような、飽和名詞と非飽和名詞の対比は、「建築家」と「建築者」、「作家」と「作者」、「看護師」と「看護人」、「会社員」と「社員」等に見られるが、あまり多くは存在しない。その他、「司会者」や「黒幕」のような役割を表す語、「社長」や「部長」のような職位を表す語、「恋人」や「友達」のような関係を表す語、また、親族語は典型的な非飽和名詞である。

第6章は、「カキ料理は、広島が本場だ」に代表される、いわゆるカキ料理構文を取り上げ、「非飽和名詞」というキーワードを用いて、その成立条件を明らかにしている。カキ料理構文は、著者によれば、一般に次のように規定される。

- (11) 指定文「Yが、XのZだ」において、「XのZだ」が述語名詞句であるとき、指定文のもつ基本的意味は、「X」を主題とした「Xは、YがZだ」でも表すことができる。このとき、「Xは、YがZだ」をカキ料理構文と呼ぶ。(p.261)

カキ料理構文におけるやっかいな問題は、次に示すように、指定文「Yが、XのZだ」に対応するカキ料理構文「Xは、YがZだ」が必ず存在するわけではなく、その成立条件を明らかにする必要がある点である。

- (12) a. 田中が、この病院の院長だ。(p.260)  
 b. この病院は、田中が院長だ。(p.260)  
 (13) a. 花子が、この病院の看護婦／医師だ。(p.261)  
 b. ?この病院は、花子が看護婦／医師だ。(p.261)

結論的に言うと、カキ料理構文が成立する(12)においては、元の指定文「Yが、XのZだ」のZの位置にある名詞が非飽和名詞であるのに対して、成立しない(13)においては、それが飽和名詞であることが決定的な要因である、と著者は主張する。つまり、外置が許され、カキ料理構文が成立するのは、(12)の「院長」がパラメーターを要求する非飽和名詞であり、かつ、「この病院」がそのパラメーターになっているため、その結びつきが強いからである。カキ料理構文「Xは、YがZだ」における、X（パラメーター）とZ（非飽和名詞）の密接な関係こそが、まさにこの構文の最も重要な特徴であり、この構文を同じく「Xは、YがZだ」という形式を持つ他の類似構文から分かつ点なのである。

最後に、本著は、著者のオリジナルな視点から、とりわけ、変項名詞句や非飽和名詞のよ

うに、変項あるいはパラメーターを含む名詞表現の存在とその性質を明らかにすることによって、コピュラ文を中心とした日本語名詞文について深く考察し、未解決の問題に一定の解答を与えたものである。その際、著者は、先行研究を十二分に検討した上で、独自の考えを展開しており、その経緯は、本書において詳細に述べられている。特に、著者の理論とメンタル・スペース理論との比較検討は極めて興味深いものであるが、この書評では、その内容を紹介することができなかった。それは、ひとえに評者の能力不足によるものであり、この場を借りてその点を謝罪したい。

#### 参考文献

- Donnellan, Keith S. 1966. "Reference and Definite Description," *Philosophical Review* 75, 271-304.
- 上林洋二. 1988. 「指定文と措定文—ハとガの一面」『筑波大学文藝言語研究・言語編』14, 57-74.
- 菊池康人. 1997. 「カキ料理は広島が本場だ」構文の成立条件『広島大学日本語教育学科紀要』（学科創立10周年記念号）7, 89-107.
- 熊本千明. 1995. 「同定文の諸特徴」『佐賀大学教養部紀要』27, 147-164.
- 三宅和宏. 2000. 「名詞の『飽和性』について」『国文鶴見』35, 79-89.
- 丹羽哲也. 2004. 「コピュラ文の分類と名詞句の性格」『日本語文法』日本語文法学会 4-2, 136-168.
- 野田尚史. 1981. 「カキ料理は広島が本場だ」構文について『待兼山論叢日本語学篇』大阪大学文学部 16, 45-66.